

富山県俳句連盟会報

令和五年度

総会及び俳句大会

安原 葉 先生の講演を聴く

令和五年度総会及び俳句大会が、木々の緑の目映い六月三日（土）午後一時より北日本新聞ホールに於いて九十二名の参加を得、盛大に開催された。坂田直彦幹事司会のもと、中坪達哉会長は「富山の風土を踏まえた俳句を作り、作るだけではなく積極的に発信していくことがウエルビーイング（真の幸せ）の拡大につながる。今日をその活動の糧にしてほしい」と挨拶。



（挨拶の中坪達哉会長）

選出し中島平太事務局

長が令和四年度の事業報告、収支決算報告を行い、大久保置滔監事が監査結果を報告し、これらを承認。さらに令和五年度事業計画案、収支予算案を提案し、原案通り拍手で承認された。任期満了に伴う役員改選にあたり、中坪会長から現役員を再選するほか、石田玲子理事、田上真知子理事、浜谷栄子幹事の退任に伴い、新たに片桐久恵（幹事より）、大塚喜子両氏が理事に、幹事会の強化を図るため森純子（理事より）北川秀子、高橋せつ子、森川敬三の四氏が幹事に就任することが承認された。全ての議案は可決し、総会は滞りなく終了する。

続いて「松の花」主宰、「ホトトギス」同人会長安原葉先生の記念講演に移る。演題は「私の俳句人生」で、葉の名前の由来や高浜虚子との出会が俳句を目指すきっかけとなったこと、また残された人生をどう生きるかなど熱く語られた。（講演要旨は別掲）

令和五年七月一日発行
富山県安住町二一四
〒930-0094 電話 〇七六-四四三-四四四
振替番号 金沢 五一一七二〇八
北日本新聞社編集局内
富山県俳句連盟

富山県俳句連盟
夏季吟行会（予告）
日時 七月十六日（日）
午後一時より
会場 ありそドーム 研修室
（魚津テクノスポーツドーム）
魚津市北鬼江二八九八一三
TEL 〇七六五（三）九八〇〇
（埋没林博物館をはじめとする海岸沿いの景観や遺産、ミラージュランド、水族館等）
締切 十一時半厳守
会費 二句出句 千円
交通費 あい風のやま鉄道魚津駅より約七分、富山地方鉄道新魚津駅より約七分

小憩後、俳句大会に移り既に出句されていた五百八十六句（二百九十三句）について講師及び連盟役員によって選考され、特選句を森純子幹事、入賞句を宮崎あつ子理事が披露し、表彰式に移る。その後、講師の安原葉先生より示唆に富んだ丁寧なる講評を戴く。続いて関口和美北日本新聞社生活文化部長から、北日本新聞社賞、中坪達哉会長から連盟賞がそれぞれに贈呈された。（成績は別掲）
浅野義信副会長が閉会の辞を述べ、総会、俳句大会は盛会裡に終了した。

富山県芸術祭主催
富山県民芸術文化祭参加
富山県俳句連盟秋季俳句大会（予告）
講師 富山県自然保護協会 副理事長 栄 君子 先生
日時 十月七日（土）午後一時
会場 北日本新聞ホール
※第五回越の讃歌、募集句のテーマ「住

合同句集（第四十八集）
原稿募集
句集を次のとおり刊行いたします。同封の原稿用紙により全員ごぞってご応募ください。
○作品数 十五句（令和四年七月から令和五年六月までの自選句）
○記載要領 所定の原稿用紙に姓号、（ふりがな）作品（春夏秋冬の順が望ましい）、本姓名、生年月日、郵便番号、住所、電話番号、所属結社または句会名を記載する。希望者は住所等の未掲載も可。
かなづかいには新旧混用せず何れかに必ず〇を付けること。
○締切 七月二十二日 期日厳守。
○出送料 三千元（一冊進呈）
同封の振替用紙で原稿発送と同時に郵便局へ払い込むこと。
○送付先 〒九三五一〇〇〇五 氷見市栄町一〇一六 坂田直彦 方
富山県俳句連盟合同句集係宛
○刊行予定 十月

春季俳句大会作品抄

安原 葉先生 特選句

涅槃図に見入る座す人立つる人 細野 千里
定年や三月晦日の駅に礼 高橋せつ子
メントモリあるがままにと生身魂 土田 由朗
高々と子を抱き上げる花の下 二口わこう
山笑ふ頓知ある子と暮しゐて 谷 順子

連盟選者特選句

義 信選 村人の長靴並ぶ涅槃寺 内橋はるみ
かつを選 旅心ゆさぶる春の時刻表 平木美枝子
冬 青選 春愁の句読点無き母の文 二口わこう
玲 子選 喪の友に言葉えらびて花だより 小澤 美子
可津志選 打ち減りし魚板の腹や梅真白 升田 義次
置 箔選 囀りへ小窓を開ける母の部屋 島竹 渥子
こつき選 ひとり夜の白湯の甘きも花のころ 二俣れい子
康 裕選 農具小屋開けて野梅の風通す 田中 憲子
久 惠選 日と風と鳥語もませて耕せり 河岸 佳子
城 子選 敵は我が心の中に春炬燵 島倉 千春
ゆづ子選 しばらくは王朝の世へ難遊び 石田 玲子
弥 生選 働けるよろこび春田打ちにけり 大坪沙智子
富美子選 水門を開きて春を呼びにけり 中嶋 黎子
美智子選 上京の子と星空のふらここに 横山 優子
洋 子選 青みどころものかたちのはじめかな 久保美智子
直 彦選 春風や猫がすべり古びをり 石黒 美幸
一 子選 春愁の句読点無き母の文 二口わこう
重 之選 風を生む手話の少女や猫柳 穂苗 良二
桂 子選 物忘れしさうな日差し桜草 成瀬 輝代
恵 子選 日と風と鳥語もませて耕せり 河岸 佳子

昭 夫選 欠伸するたびにぬくぬく海市伸ぶ河岸 佳子
勇 選 ふるさとの山河の動く雪解水 大塚 喜子
眞知子選 落花浴び真塵一枚に憩ひけり 稲田 節子
寿 山選 合わず手に落花とまらぬ出棺す 三箇 清美
三 久選 卒業子空の青さにトランペット 神田 邦子
平 太選 ふるさとの山河の動く雪解水 大塚 喜子
達 哉選 廃屋の妻の実家や実梅もぐ 稲垣 寛
睦 子選 先生の結婚話チュエリップ 水野 元雄
美知子選 暈といふ心地よきもの花疲 角田 睦子
多佳子選 農道の全長見えて初つばめ 久崎富美子
栄 子選 百歳は平均寿命亀鳴けり 林 由美子
眞智子選 鳥帰る吾の答まだ聞かぬまま 平井 弘美
幸 子選 定年や三月晦日の駅に礼 高橋せつ子
あつ子選 春兆す長き小指の弥勒像 櫻打 伸子
千鶴子選 立山の水に泡吹く種俵 成瀬眞紀子
純 子選 受験期を終へて献血バスに乗る 安居 雅寿
稔 選 たんぼの小怪おとなの知らぬ道 畠山 美苗
とる選 鳥帰る磁石あるかにまっしぐら 湯口しずえ

◇入賞句

天位⑬ 暈といふ心地よきもの花疲 角田 睦子
地位⑨ 立山の水に泡吹く種俵 成瀬眞紀子
(特選1) 農道の全長見えて初つばめ 久崎富美子
(特選1) 人を聞きて夜はいつまでも雛の前 室井千鶴子
4位⑨ 詠を聞きし夜はいつまでも雛の前 室井千鶴子
5位⑧ 物忘れしさうな日差し桜草 石川 彰子
⑧ 初蝶を羅漢の森が呑み込みぬ 成瀬 輝代
⑧ 日と風と鳥語もませて耕せり 若松 章子
⑧ 春兆す長き小指の弥勒像 河岸 佳子
6位⑦ 落花浴び真塵一枚に憩ひけり 櫻打 伸子
⑦ 山笑ふ国賓のごとパンダ去る 稲田 節子
7位⑥ 高野 弘深

富山県現代俳句協会創立30周年

記念式典及び俳句大会(予告)

日時 九月二十三日(金・祝日) 十二時半
場所 ボルファートとやま
吟行地 式典終了後富山県富岩運河環水公園
等を吟行
参加費 二句 千円

俳人協会富山県支部 俳句大会(予告)

協会員以外の方のご参加も歓迎いたします。
日時 九月二十三日(土・祝日)
会場 富山電気ビル 午後一時
講師 寺島 ただし 先生
俳人協会評議員、「駒草」同人

7位⑥ 風を生む手話の少女や猫柳 穂苗 良二
⑥ 村人の長靴並ぶ涅槃寺 内橋はるみ
⑥ 定年や三月晦日の駅に礼 高橋せつ子
⑥ 燕来る畑へ手馴れし猫車 野村 邦翠
⑥ 陽炎を潜りて路面電車行く 中村 真澄
⑥ 受験期を終へて献血バスに乗る 安居 雅寿
⑥ 句読点はつきり付けて春一番 平譯 宏修
8位⑤ あかぎれの切れる所は母に似て 坂井一二三
⑤ 戒名の一字俗名残り雪 青木 章子
⑤ 点眼のあまたをこぼし鳥雲に 飛田雪貌子
⑤ 釉薬の色のとけあふ彼岸かな 畑中あづき
⑤ 号令のまだ馴染めずに新人生 谷口 智子
⑤ さくら餅買ふなんとなく人恋し 堀 眞智子
⑤ 旅心ゆさぶる春の時刻表 平木美枝子
⑤ 夕映えの野仏の径竹の秋 金山美恵子
⑤ ひとり夜の白湯の甘きも花のころ 二俣れい子

講演要旨



私の俳句人生

「松の花」主宰
「ホトトギス」同人会長

安原 葉先生

主な経歴

一九七三年 ホトトギス同人に推挙
一九七九年 松の花三代目主宰を継承
一九九九年 ホトトギス同人会長

私は現在長岡市安浄寺の住職ですが出身は、中頸城郡春日村の光源寺（現上越市）。一九三二年に堀前家の四男として生まれ（こう）と名づけられた。私は間もなく九一歳となる。残された人生をどう生きていくかを含めお話ししたい。父は信州の飯山出身。その子には恵葉、恵威のように難しい名前をつけた。「ふるさと」を作詞した高野達之と同郷であることを誇りに思っていた。

二〇二二年に移民百周年記念俳句大会に出席しブラジルへ行ったとき、約五〇〇〇人の人達が、最後に涙ながらに「ふるさと」を歌ってくれた。印象的だった。大正十一年（一九二二年）父が中心となり五智吟社を作った。高得点者に景品が渡される点取り句会であったが昨年十月で百周年を迎えた。昭和十六年、長兄恵葉が中国で戦病死すると、父は落胆し、中風になり五年後に他界した。次兄恵威は昭和十九年に招集されたが、高松で終戦を迎え命拾いし、五智吟社を継いだ。終戦後青年団活動の一環として五智吟



社の俳句会が行われた。次兄は長兄の「葉」をとって俳号を上野葉としていた。ホトトギス会員となり、名が売れてくると、私に「葉」を譲ってきた。それが俳句との縁ともなった。昭和二十一年九月二十六日、光源寺では高浜虚子を迎えてホトトギス六百号記念額城俳句大会を開いた。参加者は約百名、その時の虚子の句は

野菊にも配流のあとの思はれて
豊替えせねど掃除のよくとどき
一句目は越後が親鸞聖人の流刑の地であり、それを偲んだ句。二句目は、実家の光源寺に戦時疎開していた子供たちが多くいたので、豊はポロポロになっていた。そのことを句にした。虚子が光源寺に来たことがきっかけで、私は将来俳句を学びたいと思うようになった。

現在住職を務めている安浄寺から、来てほしいと言われ、僧籍の資格を取るため、新潟大学から大谷大学に編入学した。編入後、京大の松尾いほは先生の元で俳句を始めた。ある寺での吟行会で、「堂縁は蟻一匹の秋日和」の句が特選となり入会が認められた。そこに虚子門下の若手リーダーの波多野爽波がいた。彼は「春菜会」を結成。毎月句会を開いて鎌倉の虚子に届けていた。私が句報の清書

を担当することになった。

ここで少し高浜虚子について述べたい。虚子は明治七年、松山に生まれ、昭和三十四年に鎌倉で亡くなった。享年八十六歳。十七歳で俳句を始め、正岡子規に学ぶ。河東碧梧桐と共に、子規門下の双璧として、子規の唱える俳句革新に参加した。松山で雑誌「ほととぎす」が発刊され、虚子がそれを引継いで「ホトトギス」に改めて発行し、今年七月で一五二号となる。

昭和三年四月に大阪毎日新聞の講演会で、虚子は初めて「俳句は花鳥諷詠詩である」と力説した。

花鳥風月この四文字に代表されていることを諷詠することが、花鳥諷詠詩だと言った。自然界の現象と人事界の現象を客観的に諷詠することであると。虚子は「季節」という語を終生貫き、「季節」とは言わなかった。「短い人生の中でこの一語を残せたことは誇りである」とも晩年に言っていた。

ここで、虚子の代表句を紹介したい。
遠山に日の当りたる枯野かな (明33)
白牡丹といふといへども紅ほのか (大14)
咲き満ちてこぼるゝ花もなかりけり (昭3)
流れ行く大根の葉の早さかな (昭3)
天地の間あわびの思はると時雨かな (昭17)
山国の蝶を荒しと思はずや (昭20)
初蝶来何色と問ふ黄と答ふ (昭21)
爛々と昼の星見え菌生え (昭22)
去年今年貫く棒のごときも (昭25)
明易や花鳥諷詠南無阿弥陀 (昭29)
私は、昭和二十九年、千葉県鹿野山神野寺で行われた二泊三日の夏稽古会に参加した。四回行われ、四回目の虚子の一句が

だった。高尚すぎて誰も取らなかつたがこの句が私の生涯を決定づける句となつた。

星野立子主宰「玉藻」の研究座談会で虚子のこの句について、質問が出た。「花鳥諷詠は南無阿弥陀と同じと解釈してよいですか」と。虚子は「同じと解釈して結構です」と答えた。少し間をおいて、「皆さんも本当にそう思っていますか」と質問した。「勿論私たちも同じように解釈しています」と返答した。虚子は、「怪しいなあ」と言い、「信仰しなれば単なる知識であり、何にもなりませんよ」と言った。私は、虚子のこの句に教えられ、励まされ、九十歳になった。

平成八年東本願寺勤務となり約十五年続いた。その間芦屋の稲畑汀子のもとへよく通った。平成十一年当時のホトトギス同人会長が亡くなり、稲畑汀子から、同人会長を引き受けてほしいと依頼された。六七歳の時である。

明治三十年虚子は大島いとと結婚した。いととの姉の夫はロシア正教の伝道師であり、宗教とかかわりができた。また、幼少時から祖母とともにお寺参りに出掛け、明治三四年のホトトギスの編集後記に、「写生は余の信仰である」と記している。
現代は、結社に入ってまで、俳句を学びたいとは思わない人が増えている。俳句界の危機だと思っている。最近、コロナ時代を生きるには何が大切かというような講演を依頼されることが多くなり、以前より忙しくなった。カルチャー教室でも俳句を学ぶ人が減らない。「明易や花鳥諷詠南無阿弥陀」の句は私の信仰と一体となった句である。ご清聴ありがとうございます。（文責 高田 勇）

令和4年度決算報告書

(単位:円)

Table with columns for Income (予算額(A), 決算額(B), 差(B-A), 備考) and Expenses (科目, 予算額(A), 決算額(B), 差(A-B), 備考). Rows include items like 繰越金, 会費, 過年度分会費, etc.

(収支差額(収入合計-支出合計) 1,335,545円は次年度へ繰越)

令和5年度予算計画書

(単位:円)

Table with columns for Income (科目, 予算額(A), 前年度予算額(B), 差(A-B), 備考) and Expenses (科目, 予算額(A), 前年度予算額(B), 差(A-B), 備考). Rows include items like 繰越金, 会費, 過年度分会費, etc.

受賞

○第41号とやま文学賞

佳作 細野 千里

消息

○富山県現代俳句協会は、三月十二日、富山県教育文化会館で令和五年度総会及び春季俳句大会を開催。投句総数九十一句。参加者三十九名の互選。天位 仏飯のお下がりを足す若菜粥 地位 黒板のすみっこ 卒業まで十日 人物 生きてゐる証に門の雪を割る 板原百合子

○第三十一回北陸現代俳句大会が五月二十日、富山県民会館で開催。講師は現代俳句協会常務理事神野紗希先生。講師演題は「他者と生きる 俳句の力」。その後成績発表。本県関係者の入賞句のみ掲載。応募作品総数九百十八句。参加者六十七名。人物 父の歯を磨く淋しさ柿の花 平野もとみ 神野紗希 特選 われからの鳴くや少年のイヤフォン 飯干ゆかり

未来からの春風めくる戦争記 櫻打 伸子 ○滑川市俳句大会が令和四年十一月二十七日に滑川市博物館で開催。講師は中島平太富山県俳句連盟事務局長。演題は「俳句四方山話」。中島平太 特選 漱洗ふ溝蕎麦ひよいと搔き分けて 高橋せつ子 やぎの杜秋は子やぎのしっぽから 稗苗 良一 秋深し煮染めびたりと夫好み 横山 優子

岩城鯉汀 特選

豊の秋かつて越中米騒動 松尾 浩子 町田忠治 特選 漱洗ふ溝蕎麦ひよいと搔き分けて 高橋せつ子

句集出版紹介

「連峰」第十七号 みのり俳句会 令5・3 「そよご」 石工 冬青 令5・4

○合同句集欠本の寄贈について(報告と依頼) 前回合同句集の欠本について案内しましたところ坂田直彦様よりご寄贈いただきました。なお予備一式を揃えたく、次の号のご寄贈を募集いたします。第一集(第九集(昭和51年)59年発行)

第42回とやま文学賞 作品募集

俳句 未発表句 二十句 (四百字詰原稿用紙を使用、ワープロ・パソコン原稿は二十字二十行打ち) 締切 令和五年九月三十日(消印有効) 送り先 〒9300096 富山市舟橋北町七一 (株)富山県芸術文化協会事務局 (とやま文学賞) 係宛

編集後記

連盟会報96号をここにお届け致します。次回97号は令和五年十二月一日発行予定です。会報に関する記事等があれば原稿用紙に記入の上、左記に送付下さい。(郵送又はFAXのみ) 〒931-0121 南砺市井波 四八五二一六 FAX・TEL (長) 八二一九〇八 高田 勇